



シャルロッテ・フォン・シュタインの悲劇『デュード』試論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 星野, 純子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006108

シャルロッテ・フォン・シュタインの 悲劇『デイド』試論

星野 純子

シャルロッテ・フォン・シュタイン (Charlotte von Stein 1742-1827) が『デイド』という悲劇を書いたことはよく知られていたが、部分的に引用されることはあっても、テキストそのものが手に入りにくいということもあり、作品全体として論じられることはほとんどなかった。登場人物のひとり、詩人オーゴンがゲーテをモデルとしていたので、もっぱらオーゴンの登場する場面だけを取り上げて、ゲーテとの関係で引用され、論じられたのである。そこでは彼女の辛辣な筆致は、恋人の裏切りに対する報復と復讐を示すものとして非難されることが多かった。

しかし、フェミニズム文学研究の成果として、1998年に『ドイツ初期女性文学』シリーズに、ズザンネ・コードの編纂によってシャルロッテの戯曲集も収められ¹⁾、作品へのアプローチも容易になり、この悲劇は個人的報復以上の問題を取り扱っていて、様々な視点から読むことができる複合的な作品であることが明らかにされつつある。ワイマール宮廷の人物模様を描いた劇であり、シャルロッテ自身の個人的心情のドラマ化でもあり、フランス革命の勃発という時代の一大トピックを背景に神話を書き直したという面もあり、何よりもジェンダー理念を問題にして、女性の政治次元への参入をとりあげた作品なのである。²⁾

(1)

シャルロッテ・フォン・シュタインその人については伝記もたくさんあり、多くの研究論文や辞典などにも取り上げられているし、どのドイツ文学史でもかなりのページ数がさかれるのが普通である。彼女は大詩人ゲーテの恋人として、疾風怒涛の青年詩人の心に沈静を与えた女性として、彼について述べる際に触れないわけにはいかない存在なのである。

だがこのような、「恋人」、「詩人の文学的靈感をかきたてたミューズの女神」、「彼を成熟へと教え導く女性」、「永遠なる女性」というシャルロッテのイメージは、ほとんどがゲーテが彼女に宛てた手紙や、『トルクワート・タツ』、『タウリスのイフィゲーニエ』といったゲーテの戯曲など、詩人自身のテキストをもとに組み立てられている。

というのも当時のシャルロッテ自身が、二人の関係の実態を伝えているテキストは残されていないからである。

シャルロッテがゲーテに宛てた手紙は、二人の関係が決裂した後に、彼女が取り戻して焼き捨てたことになっている。もっともこれには確実な証拠はないらしく、ゲーテが資料や手紙を自分の都合のよいように編纂するので有名なこと、妹の手紙を焼却したり母の手紙を選別したという事実や、コロナ・シュレーターの自伝と手紙の行方不明にもどうやらゲーテが関わって

(5)

いるらしいことなどから、ゲーテが本当にシャルロッテに返却したがどうかについては疑問の声もあがっている。³⁾

この頃のシャルロッテがゲーテに宛てた手紙に残っているのは次の一通だけで、戯曲『兄妹』(1776年)の中に、ゲーテは彼女の手紙をそのまま引用したのだと言われている。

この世がまたたのしくなってきました。すっかり捨ててしまったこの世が、あなたのおかげで、またたのしくなってきました。私は心のとがめを覚えます。あなたをも自分をも苦しめることになりそうな気がするのです。半年前には、いつ死んでもいいと思っていたのに、いまはいのちが惜しいのです。⁴⁾

ところがこの手紙も近年の研究では、慎重な判断が必要だといわれるようになってきている。ゲーテ全集ミュンヘン版の編者は、シャルロッテがそのような発言をしたことは考えられるとしても、コミュニケーション状況について冷静に考えねばならず、女友達の親密な発言を舞台の上で、また二人の特別な関係を知っている宮廷人に対してそのまま公にすることは考えられないのではないか、と解説している。⁵⁾ また、ドイツ古典叢書の編者も、引用された手紙がシャルロッテの手紙そのものとする解釈は、裏づけもできないし、ありそうにもないとして、この文の感傷主義的な調子はむしろヴェルターのロッテを連想させると述べている。⁶⁾

いずれにせよ、ゲーテのテキストをもとにしてシャルロッテ像を作りあげるほかない伝記作者たちは、すべてをもっぱらゲーテの立場に立って見ていることになる。だから、ゲーテがイタリアに旅立って以降、彼との友好的な関係を断ち、帰国後の彼に対して冷淡な態度を取り続けたシャルロッテについては、彼女がゲーテの人的成長を理解しようとせずに、クリスチアーネにたしなみもなく嫉妬と憎悪を示したとか、ゲーテには節度を教えながらみずからは節度を守ることが出来なかったのだと非難することになる。

だが、ゲーテのイタリア旅行(1786-1778年)前後に限っても、この頃はシャルロッテにとって身内の不幸が重なり、ひとかたならぬ苦勞の連続した時期だった。彼女は1787年には息子のエルンストを長い苦しい病気の後に失い、1788年からは夫のヨシアスが痛風を患い、彼のヒポコンデリーに悩まされながら、忍耐強い看病生活を余儀なくされている。彼が1793年に亡くなるまでは、親しい友人シャルロッテ・シラーを訪ねてすぐ近くのイエーナまで出かけることすらままならぬ状態にあった。コードが解説しているように「このような状況のもとでは彼女はゲーテの旅行の報告に共感的な耳を貸すことができなかつたのも十分理解できる」⁷⁾のではないだろうか。

ゲーテと知り合った1775年秋にはシャルロッテ・フォン・シュタインはすでに33歳で、ワイマール宮廷の公妃に仕える女官としてのキャリアは17年を越え、6歳年長の宮廷の主馬頭ヨシアス・フォン・シュタインとの11年間の結婚生活で、7度の出産を経験していた。そのうち娘4人はすべて早世し、エルンスト、カール、フリッツという三人の息子をもつ母親だった。あまり理解ある夫とはいえないヨシアスとの結婚生活や度重なる妊娠と子供の死という苦しい体験は彼女の人生観をベシミスティックなものにしていただろうが、後の彼女の言動からは、そ

れに打ち勝つ強い自我と能力を備えていたこともうかがわれる。彼女は宮廷文化に活発に関わっていたし、時にはアマチュア芝居の俳優になり、アンナ・アマーリアの刊行する『ティーフルト新聞』(*Tiefurter Journal*)の協力者でもあった。

ワイマール宮廷に到着したゲーテから熱烈な崇拝と愛情を捧げられた彼女は、それに応え、また彼から文学、芸術、自然科学研究など知的な面で大きな刺激を受ける。ところが1786年秋、ゲーテは彼女に知らせることなく、突然イタリアに旅立ってしまう。これ以降、二人の親密な関係は断たれ、1788年6月に彼が帰国後も修復されなかった。細々と続いていた文通も1789年6月の手紙を最後として、10年ほどは途絶えることになる。

彼女は1793年夫の死後、種々の面で活発な活動を始める。創作活動を行い、絵を描いたり、宮廷の社交生活に参加し、哲学、自然科学の読書にふけた。病気に悩まされ、老年に近づくにつれ、目や耳が弱くなり活動を妨げられたが、1813年ワイマールがフランス軍に占領されたときにも、気強くそれに耐え、フランス兵の世話をして逃亡を助けたりした。1827年に84歳で亡くなった。

こうしてシャルロッテの人生を概観してみると、彼女の人生がただひとりゲーテだけを軸にまわっていたと見ることはできないだろう。関係の破綻後も、彼女は決して彼へのうらみ、つらみの念を抱えて悶々と人生を送ったわけではなかった。

彼女の書き物としては、いくつかの詩と翻訳、5編の戯曲(タイトルも不明の喜劇1編を加えると6編)があるが、生前に公刊されたものはそのうちの1編または2編だけである。ドラマ『二人のエミーリエ』(*Die zwei Emilien*)はある英語の小説の翻案として、シラーの援助で1803年に匿名で公刊された。もう一編1809年に公刊された喜劇『*Die Probe*』は作者としてシャルロッテの名をあげているカタログもあるが、CarlまたはKarl von Steinとしているものもあり、現物は失われたので、これが本当にシャルロッテの手になるものかどうかは永遠のなぞになってしまったということである。⁸⁾

生前には発表されることはなかった彼女のドラマのうち、寸劇『リーノ』(*Rino*執筆1776年)と悲劇『ディード』(*Dido*)の二編はゲーテがモデルとなった人物が登場していたために、ゲーテ書簡集の付録として公刊された(1848-51年)。「ディード」はその後も二回新しい版がでていいる。「ディード」の写本は二種類、シュタイン家のコッホベルクに残されていた写本とシラー一家に伝わる写本があったが、後者はシラーの末娘エミーリエ(Emilie von Gleichen=Rußwurm)が受け継ぎ、後にゲーテ協会に寄贈された(フランクフルト写本)。これをもとにゲーテ学者デュントナー(H.Düntzer)が、部分的にコッホベルク写本で補って出版し(1867年)、さらにエミーリエの孫アレクサンダー(Alexander von Gleichen=Rußwurm)が1920年に版を改めて出版した。⁹⁾

このほかにもシャルロッテは『新しい自由のシステムまたは愛に対する謀反』(*Die Verschwörung gegen die Liebe* 1798)という喜劇も書いていて、1867年に公刊、1948年にも新たな版がでていいる。これは結婚をテーマとしてシャルロッテの喜劇に対する才能を示す作品である。

先述のようにゲーテ宛のシャルロッテの手紙は残っていないので、寸劇『リーノ』はワイマール到着直後の詩人の印象を、悲劇『ディード』の登場人物オーゴンは、関係決裂後のゲーテ観をシャルロッテの側から伝えるものとして、ゲーテ研究で利用されてきたのである。

『リーノ』はほんの四ページほどの寸劇であるが、若き天才、『ヴェルター』の詩人ゲーテが宮廷に到着して、貴婦人たちのあいだに与えた印象を主題にしたものである。アーデルハイデ（アンナ・アマリア）、トゥスネルデ（ゲッヒハウゼン嬢）、クニグント（ヴェルター夫人）、ゲルトルーデ（シャルロッテ）という四人の貴婦人たちとリーノ（ゲーテ）との宮廷舞踏会での会話のやりとりを通して、だれかれかまわず女性たちに言い寄るゲーテと、ヴェルターとゲーテを同一視して興味津々で彼を迎え、彼の気を引こうとはりあう女性たちとの姿を、シャルロッテは軽いタッチで描いてみせる。ゲルトルーデ（シャルロッテ）は、ゲーテの女性に対するコケティッシュで無作法な態度によい印象はもっていないが、「こうして彼は自分を制御できないのですよ。／可哀想なひと、気の毒に思いますわ」¹⁰⁾と、いくらか同情をも示し、宮廷の女性たちが男の甘いことばにすぐだまされてしまうのをちょっと冷ややかに、しかし自分は少し身を引いて客観的に観察している。シャルロッテはこの寸劇を1776年6月23日にゲーテに送った。翌日、彼は礼状に、「私はさんざんに酷評されているのですが、本当はそうじゃないことを喜んでいます。」と書き、この作品をユーモアととったらしい。シャルロッテの筆致には戯画的な調子や誇張はあるものの、冷静な観察眼が感じられ、ゲーテのワイマール到着直後の宮廷の雰囲気をも的確に伝えるスケッチになっている。

(2)

『ディード』は5幕の悲劇である¹¹⁾。まず内容を説明しておこう。

主な登場人物は主人公としてカルタゴの女王ディード、彼女に忠誠を尽くす女友達エリッサ、顧問官二人、三人の学者たち（哲学者ドードゥス、詩人オーゴン、歴史家アラートゥス）、神官アルビチェリオ、隣国アフリカ（ガエトゥーリア）の王ヤルベスとその将軍、森の隠者などである。ここでモデルと目される人物との照合関係を挙げておくと、ディードとエリッサは作者自身と公妃ルイーゼ、ヤルベスはカール・アウグスト、将軍は彼の教育係ゲルツ＝シュリッツ伯爵、詩人オーゴンはゲーテ、哲学者ドードゥスはクネーベル、歴史家アラートゥスはベルトゥーフ、神官アルビチェリオはヘルダーであるとされている。

ディードは夫のアチェルバスを、その富に目をつけた、彼女の弟、王ピグマリオンによって殺され、自分の身も危険にさらされたため、故郷、フェニキアのテュロスを捨てて、ここカルタゴに逃れてきている。

第一幕

カルタゴの国は栄え、彼女は民衆にも慕われている。商業も繁盛し、テュロスから受け継いだ学問や芸術もこの地に根づき、何不足ない彼女であるが、夫を失ったことによる喪失感を克服できないでいる。

そこへガエトゥーリアの王ヤルベスの求めで送られていた6人の使者が帰国し、そのうち3人の学者たちがディードと会見する。王は女王との結婚を望み、もし彼女が拒めばカルタゴに攻め込むだろうと脅しているのである。

ヤルベスと将軍がガエトゥーリアの兵士に変装してカルタゴの城にやってくる。彼らは神官

アルビチェリオを買収して、この求婚は神の意志であり、もし拒めば、神々の怒りがカルタゴにふりかかるだろうという、偽りの託宣をさせようと計画している。

第二幕

亡き夫への誠実をまもり再婚の意志のない女王は、一緒にテュロスから逃げてきたもう一人の弟に王位を移譲して、自分はエリッサとともに世を捨てる決心を固め、神官アルビチェリオに同意を求める。

ところが、神々の託宣をきくために神殿で犠牲の火をたくアルビチェリオの目の前で、突然祭壇が崩れ、火が消えてしまう。何か恐ろしいことが起こることの予兆と悟った彼は、王国に没落が迫っているのか、それとも女王の身に不幸がおきるのかと不安に襲われる。そこへヤルベスたちが現れるので、アルビチェリオはあわてて祭壇を隠させる。

第三幕

三人の学者はヤルベスと手を組み、女王に結婚を承諾させるために、エリッサを味方につけようとするが成功しない。

一方、ヤルベスと三人の学者たちの策謀を知ったアルビチェリオは、彼らが民衆をあおりたてていること、またアフリカの軍が近づいていることを女王に知らせ、彼女にひとりで城をぬけさせる。女王は間道を抜け、待たせてあった駱駝に乗り、森に住む隠者の許へと急ぎ逃れる。

第四幕

女王に会った隠者は王国の滅亡を予言し、まさにこの日、ディードに見守られながら、命を終える。

カルタゴでは、ヤルベスたちに扇動されて民衆の暴動が起こっていた。女王の退位を民衆に告げたアルビチェリオやエリッサ、顧問官たちはヤルベスに拘束される。

隠者の静かな死に心を大きく揺さぶられた女王もやがてカルタゴの騒乱の様子を知り、友人たちを救うために市へ戻ることとなる。

第五幕

女王の居場所をどうしても明かそうとしないアルビチェリオは遂にヤルベスから死刑の宣告をうける。

カルタゴの民衆や兵士たちは女王の求婚受諾を要求して騒ぎ、アラートゥスも一緒になって民衆を煽り立てているところへ、女王が帰ってくる。皆は彼女がヤルベスの求婚を受け入れるために戻ったのだと信じる。神殿に入った女王はアルビチェリオたちが救われたことに対する感謝の犠牲をささげるために火をたく準備をするようにと命じる。

女王はヤルベスに手を差し出して、民衆の怒りをなだめさせた後、王が誤まった忠告者を選んだことを告発して、三人の学者に国外への退去を命ずる。

そして犠牲の雄牛を引いて来させたディードは、夫アチェルバスの名を呼びながら、犠牲の火に身を投げかけ、祭刀で自分の胸を刺したのだった。

(3)

カルタゴの女王ディードの伝説は、よく知られたものとしては、ウェルギリウス（前70-19年）の『アエネーアス』（前30-19年）中の第四歌で歌われたものと、ユスチヌスの叙述とがある。

ウェルギリウスはトロイアの敗将アエネーアスが祖国滅亡の後、運命の導くままにさすらいを重ね、苦難の限りを味わい、遂に目的地イタリアに着いてローマ帝国建設の基をさだめる経緯を叙事詩『アエネーアス』で歌い上げた。その苦難の旅の途上での一挿話として女王ディードとの出会いも語られる。¹²⁾

美しいディードはアフリカ王イアルバスの求婚などには目もくれなかったが、トロイアを落ち延びてカルタゴに到着した、勇士アエネーアスに激しい愛の炎をもやす。やがてふたりは結ばれ、しばらくは楽しい歳月をすごすが、ゼウス神はヘルメスを使者につかわして、アエネーアスに航海を続けることを命ずる。ディードは全力をつくして引き止めるがかなわず、はげしい呪いの言葉を去り行くアエネーアスに投げつける。愛情と誇りを傷つけられた彼女はついに運命を逃れ得ぬと悟ると、火と祭壇を用意させ、そこで自ら剣の上に倒れ伏して、焼き尽くされたという。ウェルギリウスは女の激しい恋慕の情念とすさまじいまでの恨みの思いを、ディードの口から滔滔と語らせている。

ユニアヌス・ユスチヌスは3世紀頃のローマの歴史家である。アウグストゥス時代の歴史家ポンペイウス・トログスの『ピリッポス史と全世界の起源と地方の状態』（前19-2年の間に書かれたと思われる）をユスチヌスが抄録の形にまとめあげたのが、『ユスチヌスの抄録したポンペイウス・トログスのピリッポス史』である。¹³⁾ ユスチヌスの抄録は中世には、この作者名がしばしば殉教者ユスチヌスと混同されたために、よく読まれたものであるという。

彼によると、ディードはカルタゴの繁栄の基礎を築いた女王として登場する。

テュロスの王は死ぬときに、息子のピグマリオンと娘の非常に美しい乙女エリッサ（ディードのフェニキア名）を相続人として残した。しかし民衆はまだ少年だったピグマリオンに王権を与える。エリッサは叔父でヘラクレスの祭司のアチェルバスと結婚するが、彼の財産に目をつけたピグマリオンは叔父を殺してしまう。

エリッサは弟を憎み、ひそかに逃亡を考えていたが、財産を狙う王の裏をかき、砂袋を財宝の袋のように見せかけて、夫の供養のためと称して海に投げ込む。こうして夫の財産を無事持ち出し、仲間を引き連れてテュロスを逃れる。

キュプロス島を経てアフリカの地に着くと、彼女は巧妙な策力を用いて土地を獲得し、カルタゴを建設、この市を繁栄に導いた。

隣国のアフリカ王ヒアルバスは10人のカルタゴの高官たちを自分のところに呼び寄せ、聞き入れなければ戦争を仕掛けるぞと脅してエリッサとの結婚を求める。これをそのまま伝えるのを恐れた使者たちは、ヒアルバスがもっと文明的な生き方を彼とアフリカ人に教える者がいないかと探しているのだと女王に伝える。そして自分の親族たちを残して野獣のような生活をしている野蛮人たちのところに行くような人がみつけれらるだろうかと、つけ加える。女王が、自分たちの国の利益のために困難な生活を拒むのはよくないことだと叱責すると、彼らは、も

し女王が国の安全を願うならば、今、彼女が他人に要求したことは彼女自身がしなければならぬことなのだ、王の本当のメッセージの内容を知らせる。臣下たちのこのような狡猾さにはめられた女王はしばらくは涙を流し、夫のアチェルバスの名を呼んで悼み悲しんだが、ついに、運命を受け入れざるを得なくなる。そして決心遂行のために三ヶ月かけて、市の先端部に火葬用の薪の山を高く築き、あたかも夫の霊をなだめ、再婚する前に彼に捧げ物をおくるかのように、たくさんの獣をいけにえとして捧げた。その後で、剣をとって薪の山にのぼり、剣で生命を断ったという。

(4)

シャルロッセはゲーテとの破局が決定的になった1789年に『ディード』を書き始めている。1789年6月8日付のゲーテの最後の手紙を受け取って後、その夏にとりかかり、おそらく1794年の秋ごろに完成したらしい。『ディード』に取り上げられたカルタゴ民衆暴動の背景には、この時期にシャルロッセが見聞したフランス革命の勃発、高邁な理想に熱狂する知識人に先導されたマインツ革命、やがて恐怖政治へと進行していく革命の推移が書き込まれている。彼女はしばらくはこの書き上げたものを誰にも見せずに机にいたままにしておいた。1796年夏になってはじめて友人のエリーゼ・ゴアや、シャルロッセ・シラーに読ませた。

シラーも読んで、これを高く評価し、出版を勧めたが、彼女は「・・・そんなことをすれば私は敵をつくることになるでしょう」といって拒否したという。この言葉は彼女がゲーテを笑いのものにしたいかと思っただと、解釈されている。

たしかに、オーゴンの描き方には、ゲーテの言動を茶化したり、彼の体形の変化や肥満に言及したりと辛らつなものがある。特に第三幕二場のエリッサ（エリッサとオーゴンはかつて恋仲だった）の部屋での二人の会話は分量も多く、ゲーテとシャルロッセの間で実際に交わされたと思われる話題（シャルロッセのコーヒー好きへの忠告、蛇の脱皮の比喩など）が取り上げられ、ゲーテの発言や手紙の語句を引用したり、女王の亡夫への誠実さを賛美することで、エリッサが恋人の心変わりをからっかたりしている。オーゴンが登場する場面のこの諧謔的な調子は全体の悲劇的な情調を破っているほどで、シャルロッセはドラマ全体の構想上の必要からよりは、個人的な関心からこのような場面を取り入れたとみなさざるを得ないだろう。後のゲーテの立場にたつ読者がここだけに注目してしまったのも、無理からぬことかもしれない。そこからシャルロッセがこの劇を公にすることでゲーテをさらし者にするのを恐れたという見方もでてくる。しかし、身近な人物をこのような調子で茶化したり、滑稽な諷刺の対象とすることは、ワイマール宮廷のアマチュア芝居ではよく行われていたことで、ゲーテ自身も、いくつかの諷刺劇やジグシュピールなどでこれを試みているし、またそういう娯楽性は宮廷の祝祭日に上演される劇には要求されていたのである。だから、当時のワイマール宮廷の文化状況を考慮すると、シャルロッセが出版を恐れた理由をゲーテ像だけに関連づけてしまうと、彼女がこの悲劇を構想した真の意図が見えにくくなってしまふ。

彼女はドラマの主人公にカルタゴ女王を選んだ時に、ウェルギリウスを下敷きにはしなかった。

ウェルギリウスは、ローマ建設という大義のために女を捨てるアエネアスの雄々しさと、捨てられ、誇りを傷つけられて、制御できない怒りと恨みの情念を表出させるディードの狂女のような姿を、文学的粉飾をほどこして歌い上げていた。シャルロッテには、このような女のイメージに自分を重ねあわされることは到底承服できなかったことはもちろんだが、ウェルギリウスが女王の統治者としての側面にほとんど言及していない点にも満足できなかったにちがいない。

それに対し、ユスチヌスは素朴な文体で、統治者としての女王の歴史的事跡を忠実に伝えている。ディードは巧妙な策略を用いたり、場合によっては人をだますことも辞さない行動力で、カルタゴの繁栄を築き上げた、政治力のある女王なのである。ただユスチヌスでは、ディードは有能な女王として登場しながら、臣下たちにはめられ、背かれてからは、ひたすら夫の名を呼んで嘆き悲しみ、わずかに自分の矜持を自死によって守るだけの存在である。シャルロッテはこの最後の部分に特に焦点をあて、彼女独自の物語として、ディード神話を作り直しているのである。

つまりシャルロッテの主眼は、オーゴン像でゲーテを戯画的に取り扱うことだけではなかった。捨てられた女の復讐といった私的な感情領域を越えて、構造としての男性優位社会やその理念を批判し、政治の領域での女性の行動を描いたのである。シャルロッテが出版をためらったのも、当時の女性（作家）の置かれた状況に鑑みて、女にあてがわれた領域を踏み越えていること、境界侵犯への意識があったのではないだろうか。後世の識者がシャルロッテを非難し、糾弾するとしたら、本当はこのような点を衝くべきだったのかもしれない。

(5)

ディードは優れた政治指導者としてカルタゴの基礎を築き、繁栄に導いた女王であり、臣下にも民衆にも敬愛され信頼されている。一方、ヤルベスはアフリカの野蛮な国の独裁者である。ディードへの求婚も、狙いは領土拡張にあり、目的実現のためには手段を選ばない。金銭で神官を巻き込み、神々の力も政治的に利用するだけで敬神の念などはいささかもない。女王が拒絶すれば、暴力で国を侵略する口実ができ、いずれにせよ彼女の財産を自分のものにできると考えている。将軍に「あなたの愛によって彼女を勝ち得なさい。そうすればあなたは彼女の王位を合法的に共有できるのですから」(I-9; S. 497)と戒められても、「私が愛することなどできないのがお前にはわからないのか？この、心の幸せと誉めそやされている感情を神々は私には与えてくれなかったのだ」(I-9; S. 497)と、彼の関心は奴隷女と美しいアフリカ馬にしかないのだとうそぶき、男としてのむき出しの欲望と力をふりかざすだけである。

ヤルベスとディードのこの対比は、三人の学者たちがヤルベスと組むことで、男性性／女性性という理念の対比でもあることがより明瞭になる。

ドードゥスはヤルベスにこう言う。「私たち天才（ジェニー）の才能は、この女の統治下では、長らく埋もれさせられたのだ。神々は民衆の幸福のために私たちにそれを与えられたのに。王よ、もしあなたがこの才能を認めて下さるならば、そこから黄金の泉を汲み取ることを保障いたし

ましよう」(II-5; S. 502)。女性の統治者は男性のジェニーを正しく評価できないという思い込みと女性に凌駕されることに我慢ならない強い自尊心から、彼は男同士で手を結ぼうと申し出るのである。

第一幕冒頭で、三人の学者たちがディードを追い込む姑息なやり方については、シャルロツテはユスチヌスをほほそのまま踏襲しているが、ディードは学者たちを責めてこう発言した。

・・・それでは誰も献身的な行為 (Aufopferung) の出来る人はいないのですね、それが最終的には自分の祖国を幸福にすることができるでしょうに！・・・私たちの隣人の賢明さは私たちに幸福をもたらしてくれます。彼らの愚鈍が国境を越えて私たちのところにやってくるのと同じように。(I-5; S. 492)

すると、この「Aufopferung」という語にドードゥスは、「犠牲の行為 (Aufopferung) が似つかわしいのは誰でしょう？」と続け、自己犠牲は女にこそふさわしい、女の義務は統治することではなくて自己犠牲にあることを言外におわせる。

彼はまた、ヤルベスの意図を「命令がまた正当な男たちの手に入るときがきた」(II-7; S. 504)と解説しているし、最後の幕ではアラトゥスも、民衆が女王に向かって「人民はあなたの手をヤルベス王に与える」と叫ぶのに続けて、「私も義務に従うようにとあなたに呼びかける。王との結婚を受諾しなさい」と命令するのである。

この男性たちの連合に対して、エリッサは、ヤルベスの軍隊が近づいているとの知らせを受けたとき、ディードを代弁してはげしく男性を批判する。

おお、男はなんと破壊を好む性なのでしょう。おまえたちさえいなければ、私たちは戦争欲など知らなかったでしょうに。自然はどうして男たちにこのような営み、行為欲を与えたのでしょうか。それは、よりよき目標に向かう静かな足どりに逆らいその歩みを乱すだけなのです。永遠なる自然にはそのために充分時間があるというのに。(II-4; S. 502)

エリッサに比べるとディードは、それほど直截に男性批判を展開することはない。ヤルベスの要求を知ったとき、彼女は王位を弟に譲り、公的場面からは身を引いて生きようと決心する。戦争となると勝利は望めないと知っている彼女は、戦争とそれによるカルタゴの滅亡を避けるために、退位の決意をかためるのだが、同時に、夫を亡くしたことによる欠落感を強く意識している彼女にとっては、それが自分の感情、「内的真実」にかなうことでもあり、運命がそれを命じているとも思うのである。なぜ、カルタゴ王国から身を引くのかというエリッサの問いに対して彼女はこう答える。

まさに人民の幸福のためにそれ(退位)が必要なのです。私がヤルベスに対してこの手、決して第二の夫には渡さないと誓っているこの手を差し出すのを拒んだときに、彼が通告している戦争からカルタゴを救いたいのです。・・・(II-4; S. 501)

彼女は弟に使いを送り、顧問官たちと譲位の手はずを一応は整えてから、宮殿を逃れようとする。しかし女王の再婚を望んでいない顧問官たちにとっても、彼女のこの行動は女王としての公的存在よりも自己の内面の価値を重視した動きと映る。彼らはこういう。「彼女とともにこの国の幸福も遠ざかるのではないかと私は不安です。たしかに彼女の美しい魂にとっては内的平安が与えられるのですが」(Ⅲ-4; S. 509)。顧問官たちは以前にも、政治は「過大な善良さ」(Ⅰ-6; S. 494) だけではやっていけないとしてディードに女王としての自覚をうながすような助言もしていた。

だが危険を察知したアルビチェリオが女王の出発をせきたてた時も、ディードはそれが神官がお告げとして受け取った神々の答えだ思い、「神々が私の願いを聞き入れて下さったのだ」(Ⅲ-7; S. 511) と考える。亡夫への忠誠の誓いという女性の徳は矛盾なく人民の幸福という女王としての願いと結びつき、隠遁によって実現されると信じている。

さらにディードは五幕12場でヤルベスに向かって、「・・・しかし私は神聖な、私にとって は甘美な誓いに縛られています。これを今日、私はもう一度心の深奥から神々に向かって申し上げるでしょう・・・」(S. 530) と述べて、夫の名を呼びながら自刃した。

すなわち、五幕における発言と行為は「幕での発言の延長上」にあって、彼女の行動は一貫して亡夫への忠誠の誓いを貫いたものだと、作者は書くのである。

しかし三幕と五幕の間には隠者との出会いという大きな意味を持つ四幕がはさまれている。ディードと隠者の出会いはこのドラマの転回点になっていて、世を捨てる決意を固めていたディードはこの後で自からの意志でカルタゴへ引き返す。ところがその決断を下すに至った経緯や彼女の心理の詳細については、なぜか作者はディードには一切語らせない。森へディードのお供をした奴隷は「友人たちが捕われたということを女王様がお聞きになったら、ご自分で危険をお引き受けになるんじゃないだろうか」(Ⅳ-13; S. 521) と心配し、ディードの帰還する姿を街道で見かけたカルタゴの商人たちは「でも女王様はなぜ戻る気になられたのだろうか。貴族たちが危険にあるのをお知りになったのだろうか」(Ⅴ-1; S. 523) と噂する。ここから読者にも、彼女がエリッサたちの救出に向かったのだと知れるだけである。

また彼女は隠者との会話によって生と死についての新しい観念を得ていた。死を、精神を肉体に結びつけている束縛からの解放ととらえる隠者の言葉に、ディードは「でもこの糸をほどくのは、おそらく私たち次第ではないのですか？」と問いかけていて、おそらくはここで、自分の意志による死という決意を固めたのかもしれない。しかしディードが明言するのはここでも、従容として死に赴く隠者と比べてあまりにも急激に理不尽に与えられた夫の死へのあらたな嘆きだけで(Ⅳ-14; S. 522)、それが自分の次なる行動とどう関係するかについては何もいわないのである。

ディードは王国と女王の未来についての隠者の予言はどう理解していたのだろうか。彼の予言は次のようなものだった。

卑しい計画が喜んでそれを引き受ける人を見出すだろう。狂気が愚行を導くだろう。こ

うして名声ある王国は暗黒の深淵へと落ち込み、数百年もの間、歴史はもうその名に言及することはないだろう。しかしおまえの崇高な美德は幾世紀にもわたって記録にとどめられるだろう。(IV-2; S. 514)

この予言はヤルベス支配下でのカルタゴの姿と理解できるだろう。ディードが求婚を拒めば戦争となりカルタゴは滅亡するかもしれない。ディードはそれを避けようとしたのだが、この予言では、たとえ求婚を受諾したとしても、ヤルベスの野蛮な統治はディードの平和な統治下で得られた成果をすべて破壊してしまい、カルタゴは滅びるのである。奴隷たちの口からカルタゴでの民衆の暴動とエリッサたちが捕らえられた事実を知ったと思われるディードは、予言の「卑しい計画が喜んでそれを引き受ける人を見出すだろう」という部分を思い出し、事態がもっと緊迫していることを悟ったことだろう。つまり、学者たちに扇動されたカルタゴ市民はすでに女王の統治よりはヤルベスの支配を望んでいる。ヤルベスは三人の学者たちと結びつくことで、カルタゴの内部からディードの築きあげたものを突き崩そうとしているのである。そこに思い至ったからこそ、彼女は単にエリッサたちの救出以上のこと、つまり、「卑しい計画」で民衆を扇動する3人の学者たちを民衆から切り離すという行動にでたのであろう。だが彼女は先述のように、自分の内面を吐露するせりふでは亡夫の死を嘆くのみで、自分の女王としての行動の意図やそこに至る内面の過程には一切言及しない。彼女の関心のありかは、彼女は言葉からではなく彼女のとった行動から推し量るしかないように書かれているのである。

ディードはどのような行動をとったかを確認しておこう。

ディードは市へ引き返し、反乱した民衆をなだめ、学者たちを追放することによって、ヤルベスによるカルタゴ侵入の口実を取り除き、わが身を文字通り「犠牲」に、いけにえに捧げるといふ衝撃的な果敢な行為を実行した。それを目撃したヤルベスは「いまましい運命め！私にはおまえの力(Gewalt)がわかったが、私はおまえのお気に入りではないのだ」(V-15; S. 534)と、捨てぜりふをはいて敗北を認める。ディードはこの行動によって少なくともこの時点で出来る限りの政治的な責任を果たしたことになる。

シャルロッテはディードに表面に出た言葉としては、女性の美德として誰も異議をさしはさめないようなことしか言わせない。しかし実質としては、従順に男たちのいいなりになることを拒み、統治者として断固たる政治的行為を果たさせたのである。

(5)

『ディード』の扱った主題の多くはゲーテが『タウリスのイフィゲーニエ』(1778-1787年)で取り上げたものと似通っている。ヒロインは女に課された運命を嘆き、暴力と狡猾な知恵で動く男に、女の純粋な人間性、高潔さが対置される。蛮王の求婚、自己犠牲を迫られる女の運命、それによりあがなわれる人々の幸福と安全、人間の心を通して語りかけてくれるような神々像の希求、運命の力に抗う人間の自律性などのテーマがともに追求されている。

しかしその結末部をみると、ディードの行動は『イフィゲーニエ』で示された女性像の拒否

ともいえそうな面をもっている。イフィゲーニエは言葉によって蛮王トアスを説得して成功する。「未曾有のことをなすとげる」男の行動に対するに、「私には言葉しかありません」と意識するイフィゲーニエの饒舌は、ディードの自分の行動に対する寡黙さと対照をなしている。だが、女性の運命を嘆き、男性を告発しているかに見えたイフィゲーニエは最終的にはオレストが中心となってつくりだす家父長制的秩序のなかに救済者としてはめこまれ、あがめられ、女神として祭り上げられることに満足してしまい、実体としては無力な存在のままなのである。¹⁴⁾

この頃、ジェンダー理念に疑念を表明し、創作の主題としてとりあげようとした女性作家は少なくない。

カロリーネ・フォン・ギュンダーローデ(1780-1806年)は民族の解放者たる剛毅で英雄的な女性を夢見て、叙事詩『ヒルトグント』(1805年)でヒロインにこう言わせる。

男とはなんと素晴らしいのでしょうか、自分の運命を自分でつくりあげるのでから。/ 自分の力という尺度だけが目標を目指すときの掟なのです、/ 女の運命は、ああ、自分の手のなかにはないのです! / あるときは苦境に従い、あるときは厳格な慣習の意志に従い、/ 強力なものが命ずることを拒むことができるでしょうか?¹⁵⁾

アンネッテ・フォン・ドロステ＝ヒュルスホッフ(1797-1848年)も16歳のころに執筆したドラマ『ベルタ』で、女の身であることに安んじえない姉ベルタに対する妹の批判という形でこのテーマを取り上げたし、カロリーネ・フォン・ヴォルツォーゲン(1763-1847年)も『ロイカス岬の断崖』(1792年)で、男性は世界のものであり、女性は男性のもの・・・という男女のあり方の相違を取り上げていた。

ところがこれらはみな未完の断片で終わっている。文学的出発というべき時点でジェンダー問題に突き当たった彼女たちはみな、問題提起をただけで、それ以上には発展させることができず、作品として完成させることはできなかった。

すでに多くの人生経験を積んだ時点にたっていたシャルロッテのみが作品を完成させ、領域侵犯に成功したのだが、それは彼女が、ディードの行為を亡夫への忠誠の誓いという誰にも非難しようのない女性の徳と矛盾なく結びつけることができたからかもしれない。

しかしこれは、ドードゥスたちが要求する女性の徳、すなわち女は男に従うべきとする倫理に包摂される危険性もある、いくらか危うい理屈であるし、例えば「それにしても、わたしはなぜ男に生れなかったのでしょうか! わたしは女性の美德にも、女性の幸福にも、なんの感覚も持ち合わせていません。・・・」¹⁶⁾と書くギュンダーローデにとっては絶対にとりえない立場だっただろう。

ところで、シャルロッテが隠者の辞世の句として引用した詩は、ヘルダーが翻訳した、あるインドの詩人の箴言である。¹⁷⁾

大地よ、おまえ、わが母よ!そして/おまえ、わが父なるそよ風よ/そして、火よ、わが

友よ／おまえ、わが親族なる、溪流よ！／そしてわが兄なる天空よ！私は／おまえたち
みなに畏敬の念をもって／親愛なる感謝を告げる！おまえたちとともに／わたしはこの
世を生きてきた／そして今私は別の世へと行きたい／おまえたちをすてて。／ごきげん
よう、兄と友よ、父と／母よ、ごきげんよう！！

ディードは隠者のこの言葉を聞いて自死の決意をかためたらしく思われる。

そして1806年、カロリーネ・フォン・ギュンダーローデはこのヘルダーの翻訳を少し変えて
ではあるが書き留め、その直後にライン河畔で短剣で胸を突き自死を決行した。彼女の墓碑銘
にはこの詩が刻まれている。¹⁸⁾ 偶然とはいえこれはまたなんという不思議で傷ましい符合だろう。

注

- 1) *Frühe Frauenliteratur in Deutschland*, Hrsg.von Anita Runge, Bd.15. *Charlotte von Stein, Dramen*, Hrsg.von Susanne Kord, 1998, Georg Olms Verlag
- 2) *Einleitung der Herausgeberin* In: *Charlotte von Stein, Dramen*, a.a.O. / Katharine Goodman:*The Sign Speaks: Charlotte von Stein's Matinees*. In:*In the Shadow of Olypnus, German Women Writers Around 1800*. Edited by Katharine R. Goodman and Edith Waldstein, State University of New York Press, 1992. / Sigrid Lange:*Klassik Weiblich*, In:*Spiegelgeschichten, Geschlechter und Poetiken in der Frauenliteratur um1800*, Ulrike Helmer Verlag, 1995.などを参照。
- 3) S.Kord:*Einleitung der Herausgeberin*,a.a.O.S.VI
- 4) 片山良展訳『兄妹』 ゲーテ全集 4 潮出版社 1979
- 5) Johann Wolfgang Goethe, *Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens*, Münchner Ausgabe, Bd.2.I . Kommentar von Hartmut Reinhardt, S.612
- 6) Johann Wolfgang Goethe *Dramen 1776-1790* Unter Mitarbeit von Peter Huber. Hergs. von Dieter Borchmeyer, Deutscher Klassiker Verlag,S.921.
- 7) S.Kord:*Einleitung der Herausgeberin*, a.a.O.S.VI
- 8) S.Kord:*Einleitung der Herausgeberin*, a.a.O.S.IV
- 9) Charlotte von Stein: *Dido. Ein Trauerspiel in fünf Aufzügen*, Neu herausgegeben von Alexander von Gleichen=Rußwurm, Berlin, 1920.
- 10) Charlotte von Stein:*Rino, Ein Schauspiel* In: *Frühe Frauenliteratur in Deutschland, Charlotte von Stein, Dramen*, a.a.O. S.400.
- 11) 本論文では、原則としてテキストは『ドイツ初期女性文学』シリーズの版を利用し、引用箇所は幕、場、頁数を記した。編者コードはコッホベルク写本がシャルロッテの手稿に近いと考えられるとして、ゲーテ書簡集の付録の版(1900年)をここに収録している。本論文では、このほかに適宜1920年のAlexander von Gleichen=Rußwurmの版も参照した。人名については、アフリカ王ヤルベスJarbesは版によっては Jarbas, Hjarbesなどとなっているも

のもある。また、国名 *Jetulia* は1920年版に従って *Gaetulia* ガエトゥーリアとした。

12) 参照：ウェルギリウス 岡道男・高橋宏幸 訳『アエネーイス』京都大学学術出版会 2001年

13) *Epitome of the Philippic History of Pompeius Trogus*. translated, with notes, by the Rev, John Selby Watson. London: Henry G. Bohn, York Street, Covent Garden (1853)

<http://www.forumromanum.org/literature/justin/english/> 日本語の翻訳は、『地中海世界史ポンペイウス・トログス ユニアヌス・ユスティヌ抄録』合阪学 訳（西洋古典叢書）京都大学学術出版会 1998を適宜参照した。

14) 『イフィゲーニエ』の解釈については拙稿：『金のりんごを盛る銀の皿——ゲーテの作品の中のヒロインたち——』独仏文学第25号。大阪府立大学独仏文学研究会、1991年37頁以下を参照。

15) Karoline von Günderrode; *Hildgund*, In: *Sämtliche Werke und ausgewählte Studien*, Bd.1. Stroemfeld / Roterstern, 1990.S.98.

16) カロリーネ・フォン・ギュンダーローデ、1801年8月29日づけの手紙

17) J.G.Herder: *Abschied des Einsiedlers* 1792年

18) Anmerkungen von Alexander von Gleichen=Rußwurm, In: Charlotte von Stein: *Dido. Ein Trauerspiel in fünf Aufzügen*, a.a.O.S.138./また、Christa Wolf: *Der Schatten eines Traumes, Karoline von Günderrode— ein Entwurf*. Luchterhand, 1981邦訳。クリスタ・ヴォルフ著 保坂一夫訳 『夢の影——ギュンデローデの文学と人生』恒文社 1997年を参照。